

魅力ある授業を創ることは、これまでの授業を「学習しがい」のある授業へと改造することでもある。

さて、ほとんどの子どもは「わかりたい」「できるようにになりたい」「進んで学習に取り組みたい」と思っている。しかし、その関心や意欲が時に萎えてしまうのは、自力解決の方法がわからないということ、自力解決の訓練が不十分であることに起因しているからではないだろうか。

子どもたちが、「生きる目標（生きがい）」を持ち続けるためには、忍耐強く問題を追究し続ける力が必要である。それは既知を土台に未知を拓く力であるということもできる。これまで、たった1つの正しい答えを求めて、たった1つの正しい方法で学習してきたという反省がある。しかも、時には、そのたった1つの正しい答えや方法を覚えるという学習をすることもあったのではないだろうか。つまり「知識を教え込む教育」の反省である。これを「自ら学び、自ら考える教育」へと転換するためには、基礎・基本の徹底を基盤にした「学び方」の指導を重視し、「活かす力」を育てていくことが必要である。

従って、教師は、これまで以上に計画的・継続的に「学び方」を指導していかなければならない。そのためには、子どもたちの「学び方」の育ちを見取るとともに、身に付いた学び方が活かされる場面を授業の中に意図的に位置づけていく必要がある。

子どもたちは、既有、既習の「知識・理解」をもとにした、自ら獲得した「学び方」での問題解決を数多く体験することにより、困難や障害を自らの智恵で乗り切る力を身に付けていくことができるのである。

「問題解決力を育てる」ことは、「生きる力」としての「学力」を育てるための1つの視点である。その視点からの取り組みは、子どもの「生きる目標（生きがい）」を大切にすることであり、「活かす力」を育てることであると述べてきた。それは、要約すれば、子ども一人一人の意欲を大切にし、子ども自らが自らの方法で問題解決する場面のある授業を創ることである。

しかし、「生きる力」を「人間として意味深く生きる力」であると前述しているように、いかに意欲的に取り組もうと、いかに学び方が洗練され習熟されたとしても、それが利己的・排他的な学習であれば、先行き不透明な変化の激しい時代にもなお、人間としての誇りをもって、人間として意味深く生きる力は育たないと思うのである。

ここに「共に生きる力」を重視する所以がある。

研究課題設定の背景でも述べたような、いじめや登校拒否、校内暴力といった問題は、たった1つの正しい答えに、たった1つの正しい方法で辿り着く競争に起因していると考えられることもできる。

学校は、小さな社会であり、そこで子どもたちは、他と活動しながら、自他の痛みや思いやりを体験的に学習していく。また、学校は、自他の違いやそれぞれの特性を学習する場でもある。つまり、学校では、集団の中で共に学び合い、共に認め合い、共に高め合うことを、子どもたちに「体験」させていかなければならないのである。

従って、教師は一人一人の学習意欲の喚起や学び方の指導に力を注ぐと共に、子ども一人一人の「心」をじっくりと見つめ、教師と子ども、子ども同士の望ましい人間関係づくりができるような授業を創っていかなければならない。子ども一人一人のよさを積極的に認め、子どもの可能性を十分に引き出そうとする授業が、自他のよさや自他の可能性を大事にする学級を育てることは言うまでもない。

こうした学級の中であってこそ、自己実現は図られるのである。

以上、「問題解決力」に限って、「生きる力」としての「学力」を考えてきたが、このことは、「生きる力」としての「豊かな人間性」や「生きる力」としての「健康や体力」を育てる場合にも共通しており、三者は相補的な関係にある。

「生きる力」を授業の中で育てる場合のポイントとして、国立教育研究所の中野重人氏は「やる気」「自分で考える」「他と共に」の3つを上げて説明している⁶⁾が、このことは、先に述べた「生きる力」としての「問題解決力」「豊かな人間性」「健康や